女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百七拾四號

當府内無郵税

郵税一錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 174. AUGUST 10TH, 1889.

EDITORIAL:—Pain and Pleasure.

LEADING ARTICLE:—Dr. Johnson's Parallel between Pope and Dryden.

CRITICAL NOTES:—"Ruten" by "Hokubō Sanshi." "A Novel by Mr. Kwoson." "Woman's Hygiene."

MISCELLANEOUS:—Intense Persons. Passionate Devotions. Biwa. Didactic Poems.

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—"The Great Earthquake in Tokyo, 35 years ago."

NOVELS:—"Heart and Mind."

GENERAL NEWS.

第百七十四號目錄

社說 苦樂

論說 ドライデン及びポープ。

批評 北邙散士の「流轉」(忍)○篁村先生の小說(藤の屋)○婦嬰鑑(疲布袋)○

雜錄 熱情の人(南石外史)○執念ぶかし(是空子)○女學生諸子樂しきか(破月子)○薩摩琵琶ニ於ける疑(優香里)○悟さりの歌(山下石翁)。

笑草 冥途からお禮○瓢に入れし年せんさく。

兒鑑 わるだくみ(三)。

史傳 江戶大地震の記。

小說 冷熱記(北邙俊士錄)。

寄書 華族女學校卒業式佛文祝辭(黑岩千春)○勇論(霽山) ●宮島政子の死(明治女學校一友人)

新報 風評三十日○正誤の勇○地方の父兄諸君○暑休の學科○消夏淸風○女學生旅行○眼光小○東京新聞擠○洪水地震を何如んせん○遠近大小○舊聞。

片々 華族女學校○明治女學校○百五十年前レース。

外報 串田茂娘○シカゴ醫學校○倫敦虐殺○皇女尙す。

WOMEN IN JAPAN.

(1) *"Nippon" proposes the following five questions to authorities on education :—*

1. How much knowledge and accomplishment are necessary for woman's education in Japan?

2. Is it necessary to teach Japanese women methods of foreign social intercourse besides giving them ordinary accomplishments?

3. Is the old style system of morality insufficient for Japanese women? If so, what should be th standard?

4. Is musical education to be given only for domestic pleasure, or is it essential as a social accomplishment?

5. Novels are eagerly read by young women. What are the results of novel-reading on their education.

These questions plainly show the conservative principle held by "Nippon." Senator Kato who has, among others, sent in answers, strongly advocates religious education.

(2) *Miss Youngman has opened a summer school for women at Koyama, Sanshu. She is to be assisted in her labors by Mr. Koto, pastor of Shinagawa Church.*

(3) *That the schools for women are raising their educational grade is shown in their adding higher courses to the regular. Meijijogakko, among others, has introduced a post-graduate course of three years, the studies to be carried on by the lecture system.*

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌　第百七十四號

明治二十二年八月十日發兌

社說

○苦樂

吾人冷しき箱根山より歸京し、思ふ所ろわり熱者神田區の甚はだ陋隘なる市に彷徨よう、炎天燃ゆる如く、路砂焼けたるかと疑がわる、暑氣蒸々として立升り、足下に一種の熱臭を感ずる此ほひ、更に市の裏通りに入りて徑三尺の通路を過れば、間口九尺の小家相傾むきて列び、路板しきりに響きて異臭紛々たり、此に至れば暑つさ一層に酷はだしく、半流の風の來る所ろもなく、一握の濁氣も自由に流れ去る方なし、恰かも釜中に在つて蒸さるゝが如く、而も斤々僅かに六七疊を敷きて破れたる家具散亂する間だに父子夫婦兒童七八人屈然として雜居す。　吾人煩悶して去る能わず、屢ば來去して彼等が爲す所ろを見れば、老父は裸體となれども尚ほ苦しくして衰ろへ伏し、子供も活氣なくして遊ぶとなく相重なりて倒る、老母汗滴々辛うじて糸を紡むぎ、妻は袒裼して小き竈の前に蹲踞したり、彼等は暑しとも云はず何んとあれば朝來夜に入る迄で全日暑ければ也、彼等は團扇を用ひんともせず何んとなれば其手働らきの爲に驅らるれば也、彼等は窓戸を開かんともせず何んとなれば日光反つて直射すれば也、彼等は冷水を飲まんともせず何んとなれば其水すでに熱して湯の如くなれば也、嗚呼同じく此れ都門の人也、彼の去つて涼を山上森林に求むるの避暑者と何如なる相違わりや。　吾人いよ〳〵痛恨して去る能わず、再たび彼等を見る、時に老母暫らく紡車を止め、妻亦た竈を離れ、相見て一莞爾、共に靜かに破團扇を執りて眠れる兒供をわほぐ、母妻の顏ば些花の如し。

翌日吾人幸わひにして亦た少しの暇まを得、夙朝京を出でゝ二十里を走り、午來る比ろ、武州高雄山に達す、之を望めば滿山皆な木なり、清流環る處ろに立つて先づ涼風を納るれば、神氣すでに化するを覺ゆ、則はち裳を攝げて登る、坂延蜒して急、路畔すでに谷なり。杖を率きて吟ずれば、鬱林青淒、四方に人なく、只だ蟬の聲泉みの響に和して彌よ寂寞たるを感ず、時に見る谷底に一層の茂林あり、茅樓の頂だき現われ間を置きて人の叫ぶ聲す、怪しみて小徑を降り來れば、是れ聞く所ろの琵琶の瀧なり、林頭梢を接して天を見ず、路極まりて去る所ろを知らず、瀧聲まづ耳を打ち、流れ激して騷々たり、此に於てか靈感更らに悠暢涼氣の四面を包むを覺えて

身自づから玲瓏となれり。然るに更に近づきて之を見れば、瘋癲者十數人其保護者と共に彼の茅樓に寄宿して日々瀧の行を爲すものあり、蓋し世人本山靈の惠む所ろによれば瘋癲を治すことを得ると信ずるがゆゑ也、吾人到る時恰かも一狂婦の瀧に打たるゝを見たり、亂髮顏を覆ふて肩に垂れ、顏青白にして甚はだ凄まじ、兩手は縛ばられて只だもがくのみ、瀑水落下する下に立つて絕叫し、苦笑し、慢罵し、大號泣す、暫らくして白眼を開きて睨らみ、唇全く色なく、頭垂れ躰屈む、亦突然狂躍し、飛揚せんとす。傍わらに行者先達とか云へるもの立つ、連りに唱名して狂婦を抑ゆ、狂婦水を飲み苦しみて逃れんとすれば彼れ其頭までを壓ゆ、狂婦息氣を閉ぢ悶だへて脫せんとすれば彼れ其面を衝きて瀧の裏に押す、狂婦苦痛に堪へざる如く躍然飛び出んとすれば、彼れ足を以て其腰を蹴り瀑面に倒す。嗚呼何事ぞや、狂人何の爲に世に存す、狂人に似たるの迷信何の爲めに世に力ある、長歎して意はず狂婦を救わんとす。只見る彼が良人、彼が保護者、彼が同胞にして少しく癒えたるもの、數尺を離れて環列し叉た連に唱名す、特に彼が良人なりや、手に咒文を切り、熱禱絕叫、全力を盡して祈る。吾人此に於てか知らずして汗す、涼風の多きを覺えざりし也。

若し如此くんば、今の酷暑に當つて苦樂果して何處にかある、熱氣は固より人の堪へざる處なり、然れども若し和樂の謠すると清風の如くんば胸間豈に冷氣を覺えざらんや、涼風は固より人の喜こぶ處なり、然れども若し此に愛妻の狂するを護らば憂苦心を焼く豈に必らずしも清風を感ぜんや。若し慷慨せば山人も身の熱するを覺え、若し清默せば市人も市の冷しきを感じ、虎狼相鬪かふときは幽谷尙ほ火あり、虫吟ずるときは製造場の庭尙ほ淸氣起る、嗚呼暑寒の苦樂は必らずしも其の冷熱の地異なるによりて來らず。

吾人山を下り、泉流に口漱ぎ、草を敷きて樹陰に憩ふ、山遙かに風を送り快樂として吾人に餞むけす、則はち熟ら〳〵人世の相を觀して云く、嗚呼人何の爲めに生き、何の爲めに苦樂す、富めるものは奢り樂しみ、貧しきものは死せざるを幸わひとす、健やかなるものは人を害し、弱きものは苦痛し、狂するものは殆んど狂へる犬馬の如し、嗚呼何人の爲めに生き、何人の爲に苦樂する。人は抑そも素と苦しむべきものか、鳥は心なく天外に躍り、百合の花は愛ふる所ろなく野に咲へり、然れども吾等は只だ獨り苦しむべきものか、若し

如此なれば吾はダビデの如くに鳥とあらんことを祈り、貴公子の如くに雀とならんことを祈り、古人の如くに赤松子とならんことを祈るべし、嗚呼吾人は苦しむ爲めに生れたるか、吾等は父母を愛することを知る、然れども今や之を怨まざる可らず、吾等は國に忠ならんことを欲す、然れども今まや之を破壞せざる可らず、嗚呼吾人何の故に人間となれる、願くは石とならん、願くは山林とならん、願くは泉流とならん。

然れども人は決して只だ苦しむべきものにあらじ、若し然ることあらんには吾人は先づ天帝を疑がわざる可らず、天帝宇宙に其の大ひなる慈愛を現示するに、吾人靈感あるもの何の故に獨り苦しむ爲めに創造せられんや。然らば則ち吾人は樂しむべきものか、嗚呼山は笑ふ如し、鳥は歌ふ如し、泉は躍る如し、草は戯むるゝ如し、一思轉ずれば吾人俄然として樂し。然れども人果して只だ樂しむべくんば、世上何の故に苦痛ある、多少の苦痛ある尚可なり、世上何の故に死ある、われ父母妻子を愛す、妻子父母倉忽として死す、若し天吾等を樂しましめんと欲せば人世何の故に死ある、抑その死ある尚ほ或は可也、天何の爲に吾人をして死を惜しむの感あらしめ玉ふ、人皆な死せざる可らざるか、吾人何の故に死を悲しむの痛苦を感ぜずして存するを得ざる、花は固より愛すべし、然れども尤も愛すべきの花何の爲に早く落つる、月は固より愛すべし、然れども尤も愛すべきの月何の爲に早く缺くる、われ愛すべき新婦を得たり、新婦乍まちにして墳土の人となる、われ望みある子を得たり、子未だ身を立てずして死す、われ義人を慕ふ、義人多くは困厄すわれ泣かざることなし、われ我國を愛す、わが國甚はだ不德なり我れ寢ぬるも安き思ひあることなし、天我れに樂しましめんと欲して愛情を與へたるか、愛情は尤も切に我を苦しむ、天我に樂しましめんと欲して樂しみを樂しましむるか、世上未だ得ざるの樂しみ多くわれ之が爲に苦しむ、嗚呼吾人決して樂全する能はず。

思へらく我は必らずしも苦しむべきものにあらず、然れども亦た我は必らずしも樂しむべきものにあらず、苦樂つねに伴居し、樂苦大率ね錯雜す、故に吾人只だ其半を飲んで亦た他の半を味ふべしと。然れども既でに半ば樂を知るものは其苦に苦しむこと反つて切なり、若し人世に半樂を與へんとせば人世を悉とく苦るしくするに如かず、滿界すべて苦、而しての ち多少の安んずる所ろあらん、黑いよ〳〵白を白くし、惡ます〳〵善を善にす、天もし人を惠まんとせば人をして全樂せ

しめよ、若しくは全苦あらしめよ。嗚呼人世の相果して何如ん、苦樂抑そも何の爲めぞ、王侯貴人以下匹夫に至る迄で抑そも何の爲に汗を流す。實相未だ明らかならず、万事茫々として暗らし、我れ遂に世にあるの我を疑ふ。

然れども天地如此く大、山川如此く美、吾人如此く感ず、天帝豈に徒らに人間を造らん、人間豈に徒らに苦樂するものあらんや。勸告す世上の同胞姉妹、人は只だ苦しむべきものにあらず、亦只だ樂しむべきものにあらず。然りと云へども亦た只だ苦樂を半ばにして之を分受すべきが爲に苦樂するものにもあらず。見よ、只だ苦しむが爲に苦しむものは天下に一人もなし、然れども樂しむが爲に樂しむものは亦一人として實に樂しみ得たるものなし、況んや彼の苦樂を半ばにせんとするもの、如きは實は只だ全苦に甘んずるもの也。見よ、天帝は聖淸なり、人間は至靈あり、宇宙は嚴肅あり、人世の希望決して徒らにあらず、吾人が苦樂は只だ此れ學校擢選の賞罰點數に似たり、苦樂彼自から最後の目的にあらず、寧ろ吾人を進ましむるの方便なる也。われ等花を愛するとき花忽ちにして摧だけ、吾人親を愛するとき親忽焉として死す、世上の流轉皆な吾人に大ひなる教へを與ふ、われ等苦しむとありり然れども其苦吾人を玉にす、われ等樂しむことあり樂しみ頓わかに奪われて而して大ひに吾人を教ゆ。吾人元來樂しまんとして樂しむときは常に悲し、然れども素と善を爲さんとして苦しむときは苦中常に樂あり、諺に云く俗世唯だ一の眞情あり即はち親の其子を愛するの慈なりと、蓋し親の其子に於ける万苦蝟集するにあらずや、然れども其苦の反つて彼をして樂しましむるものは彼に素と樂しみを要するの念あらざるが故也、凡そ樂しみを要めずして人の爲に獻身せば樂しみ招かずして來る、此に於て苦中尚ほ樂あり、樂中素より眞樂なくんばあらず、人は善を爲すが爲に生き、善を爲るが爲に生くるなり、吾人如此く觀すれば人世の事悉とく解釋せらる、不幸も、夭死も、涙も、苦しみも、樂しみの常に得られざるも、惡人の存するも、人の殺ろさるゝも、義者の必らず惠まるゝことなきも、皆な如此して解釋せらる。

左れば世人乞ふ先づ其の性に反へり、深く覺悟して先づ善を爲すに決すべし、高帽高官果して何の樂しみある、名位權勢果して何の樂しみある、人間の我に膝を屈する我れ何の樂しきとある、世上の黄金を奪ふ我れ何の樂しきとある、此等の事もし善を爲すに用ひば我れ至樂滿幸あるを感ず、然れども

若し此の一粹存せずんば万事味なし。子を失なへるものよ泣く勿れ、夫に後れたるものよ絶望する勿れ、志を得ざるの青年よ落膽する勿れ、失敗の英雄よ斷腸する勿れ、花落ちて果影れ、月隱て露結ぶ、君等もし善にして陽九に會せば此れ即はち君等の幸わひとなるべし。吾人今の青年を見る、其の壯氣固より愛すべし、然れども若し支那の豪傑を慕ひ、徒づらに名を爲さんと欲して國家に活動せば、諸君はすでに死せるもの也。吾人今の文學者を見る、其文學いよ／＼達す、然れども若したゞ快樂を望み名譽を貪ぼりて文を綴るあらば、文章玉の如しと云へども既に臭なり。吾人今の美術論を聞く、漸やくにして其微に入らんとせり、然れども若し樂しむとを專一とするの美術起らば日本はすでに不德の界に入れりと知らざる可からず。嗚呼政海にも、文學社界にも、何處にも先づ善を慕ふの聖氣あれ、聖氣一とたび欠く、青年慷慨すと云へども賴むべきの眞英氣あるなし、文章美なりと云へども人を天に導びく能はず、美術鬼を泣かすと云へども人心すでに腐敗すべし。世に幾多の不德不幸あるに關せず若し強き聖氣の常に活存するあらば可也、聖氣凛々として潔ぎよくば總べての苦樂皆な善からざるなし、道を愛するもの丶爲には總べての者皆な善からざるなし。

論説

○ドライデン及びポープ

井上次郎譯

詩人ポープはドライデンの詩を學びたりと云ふ、故に彼れ機會ある毎にドライデンを賞揚し終生遂に渝はるとなし、故に彼れが性情を知悉せんとするには、先づ之をドライデンの性質に對比して觀察するを可とす。

智解の正直なる、辨別の細密なる事に付ては、ドライデン決してポウプに劣るとなし、ドライデン常に詩作上の僻見を脫し、不自然の思考を去り、不調子なる詩句を止めたり、之に依りて其の腦力の質直なるを推知すべし、然れども彼れは單に嗟にして作るとあり、未だ嘗て其懷抱する總べての判斷力を傾盡して后ちに作りたるとあらず、彼は云ふ我はたゞ人の爲めに吟ずと、然り彼れ如此く吟じたり、而して彼も一と度人を娛しましむれば彼すでに滿足せり、彼は其の未發の潛力を發達せんと勉むるとなく、すでに善き所ろの者を更に善くせんと勉むるとなく、更らに甚しきは或は既に誤謬なりと認たる所ろのものを屢ば正誤せざるとあり、彼は其自身にて言

へる如く實に思考すると甚だ少なうして詳けり、若し場合或は必要の事出來して彼が吟詩を要するとあれば、彼は之を諾するの瞬間時に於て感悟したる所のものを注ぎ出し、すでに其の印刷せられたる后ちは更らに全く忘却し、すでに原稿料を得て手渡したるのちは再たび復た掛念するとなし。

ポープは之に異なり、常に擢んでんとを欲するが故に、斷えず其の最極の力を盡し、故さらに讀者の不偏なる平心を求めんとはせずして、只敢て其の判斷を蒙むらんとを欲し、其の詩作に對して他人の少さかも寛假する所ろなからんを望むが如く、其の自巳自づから判するも亦極めて愼密なり、彼は細密嚴格なる觀察を以て其の語々節々を吟味し、疲れざるの勉强を以て其の各部分を修飾し、最早一字の遺憾なきに至らずんば置かず。

ポープ往々人に語りて云く、其の著作に對するの掛念は著作を出版したる時に於て終ると、然れども此れ決して實情にあらざるが如し、其の兩親の如き親切を以つて自作を見るの情は、前后決して其の著作より離るゝとなし、故に其第一版に於て遺したる誤謬あらば則はち靜かに之を其后の改版に於て正せり、左れば其のイリアッドの飜譯の如きも、出版后屢ば削正して其の足らざるを足し、其の「批評論」の如きにも、第一版后に於て多くの改頁を與へたり、而して其の改むる所ろあるや必らず文の明晰、華麗、勢力を増さずんば止まず、彼が其の著作に對するの掛念如此し、故に彼は恐らくドライデンの判斷力に及ぶとを得たり、然れどもドライデンは確かにポープの勉強を欠きたりし也。

其の智識の多少に就て評せば、必らずやドライデンを以てポウプの上に置かざる可らず、ドライデンは古文學的の教育を受け、其の著作に從事する迄に學びたると甚はだ長く、且つ學ぶに善方便を得たると至つて多かりき、故に其の腦力廣濶にして種々の區域より思想例證を集め來るを得たる、之れポープの及ぶ所ろにあらず、左ればドライデンは人間の普通性を知悉し、ポウプは其の特別性を知悉したり、ドライデンの說は廣く包容したる思考より成り、ポープの說は細かに注意したる觀察より來る、之を以てドライデンの智識には尊とむべき處ろ多く、ポープの智識には委賴すべき所ろ多し。

ドライデン、ポープ、ともに只だ詩に於て長ずるのみにあらず、彼等亦た散文に於ても長ずる所ろありし、而して散文に於てはポープは決してドライデンを尊崇したるものに非ず、

蓋しドライデンの文脉は變り易く種類多し、ボウプの文脉は用心深く一調子なり、ドライデンは其心の動くまゝに隨がひ、ボウプは自らの作文法に隨つて制したり、ドライデンは時として性急急激なり、ボウプは常に滑らかに、一様に、溫和なり、ドライデンの文章は自然の野自づから起伏凸凹し、多種の植物自然に生成して自づから野色を分別するが如し、ボウプの文章は鋏を以て刻み、轉壓器を以て壓定し、深く手を入れて天鵞絨の如くにしたる草地に似たり。

抑そも天才とは、詩人を造成する所ろの力なり、此の天質なくんば判斷力も冷たく、智識も力らなけん、此の天力あらば能く事物を集め、結付け、寬大にし、活かすとを得べし、故に天才は詩人の精なり、而して此の天才の大小何如んを考ふるときは、言ふ迄もなくドライデンを以てボウプに優ると爲すべし、唯だ夫れ之によりてボウプの詩才を卑しむものあらば不可也、蓋しボウプの詩才少なきにあらず、ドライデンの詩才異常廣大なりし也、然れどもボウプ亦決して尋常の詩人にあらず、ミルトン以後幾多の名家ありと云へども皆なボウプの後に立てり、ドライデンと云へども其一章一節に付ては大にボウプに優りたるの名句ありし、然れども其の一篇の上に於ては遂にボウプの作に及ぶものを有たざりし。

ドライデンは其の家計の窮乏により、若くは外情の必迫する所ろにより、遂に倉卒に作了したり、彼は考慮する所ろなく作り、校正する所ろなく出版したり、彼の腦力が一呼に應じて供え得たる處ろ、一穿鑿に由りて集め得たる處ろは、此れ即はち彼が作詩に於て求むる所ろの總べてなり、而して亦た其與ふる所ろの總べてなりし、然れどもボウプは遲緩謹愼にして作る、故に其の感思を集合し、其の想像を加増し、其の學力の出し得る所ろ、其機會の供え得る所ろを集め、而して後ち結構したり、之を以てドライデンの達る所ろ甚はだ高しと云はゞ、ボウプの翼を張ること甚はだ長しと云ふべし、ドライデンの火燃ゆること熾んなりと云はゞ、ボウプの火其熱增減なく斷絕なしと云ふべし、ドライデンは讀者の希望に越えたると屢ば之れあり、ボウプは決して讀者の希望の下に落ちたることなし、ドラインデの詩は幾多の驚愕を以て讀まるべし、ボウプの詩は永久の愉樂を以て讀まるべし。

批評

○北邙散士の「流轉」　しのぶ

國民之友が夏期大附錄を添えんとの趣きを預告するや、廣告文中に四絕の良文字あり、即はち於母影と云ひ、良夜と云ひ、

消夏漫筆と云ふなど、皆な此題號をのみ聞きて既に詩の如く感ぜられつるに、取分け北邙散士の「流轉」と題するに至りては、われ甚たく心を動かして待てり。北邙散士とは文壇に初めて見るの號なり、其の何如なる人にてあるやを知らねど、名を撰ぶ所ろ既に尋常にあらず、特に今ま風月良夜を求むるの時に於て「流轉」と稱すべき幽玄の好小說を綴らんとすると更らに尤もなつかし、廣告文中尚ほ著清風故人の來るを待てと云ふ、己れ實に未だ見ざる同朋の來る心地し、一擺一擲して之を待てり。

昨夜國民之友第五十八號郵送せられたれば、何よりも先づ彼の一小說を通讀したり、上下二篇の短文章なれば暫らくにして讀み了り、惜しき心地し、殘念なる心地し、或は少しく失望したる氣味を覺え、又た大ひに樂しみたる思ひも出たり。先づ第一に驚歎したるは、此小說家我に初めての知己にてあるとなり、近比の文壇に斯る沈鬱的の作者あるを覺えず、特に又斯る幽深的の趣向を作りたるものを見ざれば、われは一個の稀友を得たる思ひありて甚はだ喜こびあり、思ふに此の小說は活人物を寫したるの小說にあらず、渾て是れ北邙散士一己の懷する所ろ感ずる所ろ亦多少其の經歷したる所ろを寫したるものならん、われヨンソンのラセラスを讀みて小說なりとは思わず、然れども讀去讀來して一條の神氣明滅するに感じ、わが精心の動くと切なりしが、此の流轉を讀むに於ても亦た如此き心地したり。

此篇固より欠點多し、文脉言文一致を旨としながら耳に聞きて悟りがたきのみか目に見てだに六かしと思ふ文字甚はだ多きに、作語の力左程にもなく重疊したる數箇の連文未だ新らしき思想を起さゞるの怨みも少なからず、倘且つ

其他世にも哀れ薄命の多くの非人が月に四五回位宛、

と云へる如きは禮に來るか貰ひに來るか分らず、多くと四五、何との一句何れか無用にして反つて意義を暗らくし、又

心も自然大人びて來て、完全圓滿の者を求める樣になつた

の一句はわれ何如に考ふるも其意味を悟らず、二九の少女に於て特に斯る情思の出るものか吾れ未だ聞しとあらず。斯る曖昧の文字少なからぬに、寫したる人物も之をカラクターとして評するときは頗ぶる欠けたり、先づ賴方は祖父の死後家政の調理に餘念なく身を委ね、政治家ともならず記者ともならず文人ともならず紳商ともならず、すでに學あり財產あるに拘はらず、又自づから達人たるを許すにも拘はらず、世に

何の不平あるにてもなく、亦嘗て世故に失敗したるにてもなく、又其の年齡の左程に老ひたるにてもなきに、早くも牛八九頭の牛乳主人となり、一本の釣竿、古今の書物、朴納の農夫を相手として都近くに閒居すと云ふと、未だ何事も爲さゞりし年少の人に初めより斯る閒雅老靜したる安心のあるべき筈なし。又其妹お露と云へるは、幼なくして既に物をあわれむの氣象ありしよし、散士は先づ此の氣質を畫がき置き、後に其の憂鬱の人を見るに及びて憫愍の念一轉して戀愛に趣くの情を寫さんとせらる、伏案の覺悟巧ならぬにてはなけれど、彼の少女は蛇に見込まれた蛙を見ると棒を以て蛇を追ふなどの事をせしよし、乳母が女の兒はおとなしくするもので、左樣な荒々しい事はせぬものと意見したとあれば、彼の蛇を追ふとは固より、犬の兒を助くるにも、育の子を救ふにも、常に荒々しき所行ありしと覺ふ、此れ實に長じて優雅溫和となるべき慈善婦人の氣質にてはなく、寧ろ俠客はだの女丈夫となるに適するの性なり、故に後の十八の少女に合せ見るにお露娘の人物甚はだ明らかならず。又た、林は多年國學を學び、一年半前より初めて詩人たらんと心掛しもの丶由、左れば若し洋學を學びしとするも二年に過るの覺悟はあらじ、左るに其の論ずる所ろを聞けば全く此れ大洋學者の辭ばなり、特に詩人たらんと決心せしよしなるに、其顆方と論ずる所ろを聞けば極めて冷々たる哲學者的なり、特に其の「天が高いとか、月が清いとかいふのは唯色相上の觀念で畢竟詩人の囈語たるに過ない」と言ふに至りては、果して詩人にならうと云ふ目的あるもの丶言葉か、彼れ愛したる佳人を失ひ、信ずべき親兄弟を失なひ、榮枯得喪の裏に落渕して白眼冷觀のメランコリッシなる人物となりしとゆへ、寧しろ倫理を窮むる哲學者たらんとこそ思ひ付べけれ、彼が詩人たらんと發心せしよし頗ぶる奇し。

凡そ如此く、惑ふべき所ろ、疑がふべき所ろ少なからねど、全篇を貫ぬき穿つの神氣一條甚はだ高し、其の北嶋村新主人公の相續の所ろ、冷寒の人河に傍ふて朝早く眠り、夢に故人を懷ふて起きて暫らく快活ある所ろ、少女の思ひ彌よ切にして吾が心將に動かんとす此時乍まち飄然として出で行く所ろ、すべて是れ近來の作者の寫さゞるもの、此人獨特の長所なりと云はん歟。少女机に向ひ突然首べを揚げて荒らかに扒を押のけ、きつと前を見て何時か又ウットリとする處ろ、若し相對する時は、俯向いて居れども不思議に林の擧動を殘

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

りなく知ると云ふ處ろ、彼れ未だ戀を知らず、靜かに吾れ吾心に尋づねて顏赧然、始めて自身の戀したるに心付しと云ふ處ろ、皆な是れ極めて微なる觀察より來り、多く西洋小說を讀みしものならねば、目にも付かず記臆にも殘るまじき人情なり、此邊に於て甚はだ散士の筆力に驚ろく。

然ども余が此の小說に尤も驚歎したるは此等の點にあらず、即はち其一條の神氣幽徹して、作者自已が善を求め、安心立命の地を求め、愛辭懷疑の中ちに禪理を考へて未だ其安きを得ず、漾々茫々として世を果敢なみ和を觀ずると云へども其自然の德性冷むるとなくして常に熱動するの趣き、現然として見わる、わが作者に同情を抱くと至つて切なり。左れば已れ此の「流轉」を見て一好小說を得たりとは思はず、寧ろ一の新らしき好小說家を得たりと喜こぶ、從來今の小說界に如此き人ありしを見ず、輕俊なる批評家的の人あり、濃雅にして想像に富める人あり、凡通達俗にして世の下情に甚はだ精はしかるべき人あり、結構宏大空闊壯嚴にして快を與ふるの人あり、輕妙無垢快然として啞絕せしむるの人あり、然れども未だ如此く幽深、單潔、沈欝、高尙なるの作者あるなく、亦た如此く凜秀ある小說の出んとする望みあらざりし、而して今ま初めて之を得たり。請ふ見よ太陽落れるのち陰森たる月夜あるにあらずや、一野千里の背欝靑たる森林あるにあらずや、天下の英雄大率ね多少の幽鬱たる處ろを存するにあらずや、而して今の明治小說家中よく此の趣味を喜ばすとを得るの人あらざりし、况んや彼の善を求め義を慕ふて高く靈化せんとを熱行するものを理想するの作者に至りては尤とも少なかりし。然るに今ま初めて一人を得たり、われ北邙散士の此の小說が能く如此ありと云ふにあらず、但だ其中に現はれたる一線の神氣は他日大に發揚して遂に彼の大欠點を滿すに足りなんと云ふのみ。北邙散士抑そも何人ぞや、われ其人を知らんとを欲す、嘗て嵯峨のや氏の「初戀」を讀むに、全篇の文字潔白潔美、而して結末に至りて俄然として沈欝に沒したり、われ遙かに想ふに此の「流轉」少しく彼に似たり、北邙散士果して嵯峨の屋氏にあらざるか、否や。われ固より之を辨知するを得す、然れども今の小說家中北邙散士に尤も近きものは必らずや嵯峨の屋氏ならん、故にわれの峨嵯の屋氏に望む所ろ大率ね亦た上述するが如くあらずんばあらす。

○篁村先生の小說(「むら竹」一篇及二編)　藤の屋主人

大むかしに源氏狹衣中頃にお伽草紙の類あれど近く小說らし

き小說を創作せしは井原西鶴あり。西鶴俳門に出て一家の文格を作り艶なる文字を以て巧に人情の秘奧を穿ちしは前に元より人なく後に摸倣する者多けれど能其堂に到はなし、其傑作一代男二代男一代女五人娘男色大鑑等及後二百有餘載を經たる今日に到て猶ほ文學の師表となる。西鶴に續て現はれしは江島其磧にして西鶴の風を慕ひ更に一派を出し而も其立案は愈々精となりて小說の躰裁は較や完美したりき。其後馬琴種彥等の人々輩出して互に其技を戰はせしかど文章に於ては前の二人に及ばず、例へば馬琴の如き七五の調をもて勝を俗人の間に得しが文字の婉にして情を含みたる二人の文と比すべくもあらず。よし小說として進步したるも文章に於ては古今西鶴其磧に及ぶものなし、唯此明治時代に一の比すべきあるを見る、卽ち篁村竹の舍主人なり。

今の世にありて好んで西鶴の文を作るもの余の知る處にて三あり、卽ち愛鶴軒露伴子及紅葉の三氏にして共に西鶴の神髓を得たり。是を細かに云へば愛鶴軒は純粹の西鶴にして露伴子は今文を交へ紅葉は西文を加へたるが如けれど此三氏は到底西鶴を去らざるなり。篁村先生は西鶴其磧に出入し別に一派を爲したるが如く讀了つて文味深々、西鶴其磧を讀むと更に趣を異にす。例へば西鶴を一蝶とし其磧を歌麿に比せば先生の筆は眞虎の如く奔逸自在ならんか。先生の文は前の三氏の如く西鶴にもあらず又其磧にもあらず、故にもし西鶴其磧を標準として是を判ずれば或は西鶴の如く婉ならず其磧の如く易らかならざれど其磧にも西鶴にも見るを得ざる一種の輕妙は則ち先生が特殊の長所なり。余が曩に先生の「堀出し物」を罵評せしは其平生に似ずして流俗を阿りしを以てなり。先生が常に時俗にも諛へず勝手氣儘に其長所を逞ふせしは實に不可言の味ありて余等乳臭の輩は唯繰返し〳〵厭くを知らざるのみ何をか妄批を試むべき事やあらん。余「むら竹」二冊を讀みて愈々先生の伎倆を畏敬し明治の西洋的文學時代又日本の文章を沒せざるを祝す。

「むら竹」二冊は七小說より成り、其最も長きを玉簾及走馬燈の二篇とす。いづれも優劣のあるべきならねど先生が作は文に味あつて脚色に賞すべきあければ最も傑出なるは短小說にあるが如し。西鶴も其磧も時代が時代とは云ひながら脚色は幼稚なるが多く概ね文章に勝を制するなり、例へば一代男或は二代男の如きも主人公は始終一人なれども趣向は通篇貫徹せずして一回一脚色なればよし其一回或は二回を抹殺する

一一

も全篇に於て關係する處極めて少なし。是れ西鶴及其碩の缺點にして此二人を奉ずる者は大抵同弊に陷る。前に擧ぐる三氏を以てするも或は此弊あらんかと思はる。篁村先生の如きも又同病者にして長き物語には往々讃賞を加へがたき者あり。此「むら竹」三冊を見るも作者が最も刻苦せしと思はるゝ玉簾及走馬燈は却て草率の筆になりしかと考へらるゝ窓の月及松の雨の二篇より劣る事萬々あり。篁村先生の長物語には主人公時として曖昧になり人物次第に變り前後錯綜する事多く趣向一轍せざるの憾あり、唯短小說に到つては凡常の筆及ばざるのみか西鶴にも其碩にも見るべからざる一種獨得の妙味あり。例へば二篇の松の雨を見よ、主人公小林がひねくれた氣性紙上に浮び出るが如し、是等は今に有て唯先生の靈筆能く是を作るのみ、窓の月も同樣の妙味ありて五回の末に「弄らるゝのも始めこそ嬉しけれ今となりては臆病づき人に我名を呼ばれてもドツキリ胸が躍るほど切なるもの」とある如き何でもなき樣なれど娘心の底を叩きし手際凡庸のものいかでか學び得ん。是れ篁村先生の妙處なり。

されども先生の筆を西鶴其碩と比較すれば第一にシユパサイズする事能はず第二に理情一致せざるに似たり。先生が筆は貶して申さば愛敬は充分に滿ちたれども力味の薄きかと思はる。殊に愛敬に滿過ぎて時に馬鹿らしき事あり、例へば玉簾の小僧新吉の如き圓游が成田小僧と殆んど同樣にして却て妙ならず、又他山の石のお高の如きあまりに性質の淡くして乙女に此人ありとも覺へず。是等いづれも先生が時に陷る處の缺點なり。

七小說いづれも「堀だし物」の比ならず、余は益々「むら竹」の生長せん事を祈請す。今に到つて猶ほ記臆す、三四年前の十二月讀賣新聞に「時の用」ある短小說ありし事を。七小說は未だ充分に評するに足らず、他に圓滿無缺のもの頗る多し。

(89)○衞生敎育 婦嬰鑑　渡布袋

本書は索遜王國侍醫ドクトル亞、亞、安門原氏の原書を渡忠純氏譯し萩原三圭氏の校正を經たるものにして其上編一冊世に出でたり。科學に關する諸書にして今日の我邦婦人方に愛觀せらるゝもの尠きは私に歎ずる所ろあり。育兒法產前產後の養生法の如きは汎く世の母たるもの心得てならぬとなれは此等のとを說く所の書既に世に其類多し今又女學社會に此書を得たるは我女學の爲めに祝する所なり。本書は第一編に姙娠、第二編に分娩、第三編に產婦の攝生法を說けり。之れを

略評すれば往々粗漏なる所あれども項目は繁多あり科學的の學語に傍假名を附するは誰れしも困難とする所なれども本書の如きは總體に漢語多く日本文の兩側に傍假名を施されたるとなれば編者の勞尠からざること思はるゝなり此書に最も殘り惜き所は元來翻譯書なれは本邦婦人には餘り必要にあらさることを詳述し反て必要なることを説明せざるか如きこと頗る多き様思わるゝこと之なり。假令十六頁「緊縱恰好の靴を著て、足を温め濕を防べし。妊婦は體重の比例變じて歩行確ならさるか故に足の形を縮少せんとするが如き外見に絶念すへし、靴の踵高に過れは戸閾階段或は敷物等に觸れて蹉跌傾倒し、之れに次ぐに流産の患あり、膝帶は緊く結ぶ可らず、緊結は脚部に凝血を起し、靜脈の擴張を生ずるに至る」と論じながら本邦婦人の高下駄を穿き蹉跌傾倒して流産すること等を戒めざるの類なり。

凡そ衞生上のことは衣食住に關係多く國土風習の異なるに從て自ら同じからざるものなれば本書の如きも之れを翻譯書とせらるゝよりも寧ろ此書を基礎として日本流に著述せらるゝところ我邦女學界に信實あることを信ずるなり。

雜錄

○熱情の人

南石外史

此頃の暑つさ酷ならざるにあらず、左れど堪へがたしと云ふほどに非ず、此は東京のみにてなく、總じて日本の氣候は然ることあり、啻に氣候のみならず、山も好き程に高く、谷も好き程に深く、川も好き程に流れ、池も好き程に止まる、左れば氣候温和、山川軟和、民心柔和、流行る處は和歌、慕ふ所は平和、顔を和らげて直ちに和睦するを以て人の德とす、古來稱して大和の國と云ふは實に適したりと云ふべし。吾輩必らずしも不平和を好みて人々の騷々しからんことを願ふに非ず、左れど餘りにお心好き湯に這入りし如き人物のみ好ましくもなし、諺に云く惡に強きものは善に強しと、日本に左したる惡人なし痛むらくは左したる善人も生ぜざらんことを。故に氣候も死ぬるほどに暑いとか寒いとかにて、獸も虎とか獅子とか云ふが横行し、野蠻人もアイノの樣でなき殘忍なるが間を窺がひ、壓制も或る時は手ひどく落ち來り、戰爭も時としては素ばらしく行われ、決鬪も滑稽らしくなくなり、復讐の氣骨も凛々として活き、地震洪水火事饑饉の如きも行わるゝときは非常に行われ、茶漬も止めになりて肉食が盛んに

なり、單へ物も廢して毛皮革衣を着し、斯て民心をして、憤恨、沈痛、熱愛、酷烈、ならしめ而してのち悠々化して善强の國民たらしむるとに致したし。左れば人々此の程の暑さを暑しと云ふと莫れ、寧ろ其の一層に暑つからんとを願ふべし、是れ愛國の根性なり、傍わら消夏の一方なり。

○執念ぶかし　　是空子

嘗て四谷稻荷、重ねの亡靈、など云へる演劇を觀て甚はだ爽快に感じたり、日本人の熱情執念希ねがわくは如此くありたし、彼の幾度びにても化けて出て取り殺さねば措かぬと云ふ處ろ甚はだ珍重すべし、むかし古人は日本人を朝日に匂ふ山櫻の如しと云へり、之れ實に悲しき適評なり、山櫻の如く淡美潔白なるは有がたきやうにして頗ぶる頼母しからず、寧ろ日本人は鬱松の如しとか、巨蟹の如しとか、花ならばボテり〱としたる牡丹の如しとか云われたし、故にわれもかた人の淡泊輕優ならんよりも、皮うすく感じ強よからんよりも、シャレに達して小器用ならんよりも、重くるしくして常に山の歩るく如く、大抵の摩擦に由つては中々に温たゝかくならず、甚はだ武骨にして間に合わず只だ大ひに用ゆるに適すと云へる人物てありたし。左れば女性の執念ぶかき所ろ、咽笛にでも噛付くと云ふ處ろが甚はだ賛成なり、彼の人を慕ふてもなく慕はぬでもなく、只だ通りがけの浮きたる情けにて動くと云ふ如き日本男子は至つて嫌らひ也、万人の愛に思を寄せず、只だ一人、即はち生るゝより死する迄で、天帝に創造せられて世に出し以後極樂か地獄かの何れに這入ると云ふ間際迄で、一人の外に極底の愛は與へずと云ふ熱情を欲す。浮氣、移り氣、凡通、通人、達人など云へるは當分日本の戸籍中におらせたくなし、泣くならば鐵の涙を引張るべし、怒るならば噴火山の火を噴くべし、笑ふならば大口開いて鬼の如く笑ふべし、戰ふならば敵の心を貫ぬき頂骨を剝ぐべし、可愛がるならば丸るでたべて仕舞ふべし。左れば今に於ては男風ならんよりは寧しろ女風にてあれ、老ひたるも若きも、男も女も皆な吝氣すべし、頂點迄思ひ凝めるべし、執念深くあるべし、幽靈にでもなれるやう心掛くべし。

○女學生諸子樂しきか　　曉月子

諸子は熱沓なる都門の空氣を避て清風新流の境界にあり、諸子は亂雜なる思想を捨てゝ今や靜粛なる快樂を取るに非ずや諸子よ樂しきか、諸子が學窓の元に苦學せし報酬は實に今日にあり、諸子よろしく今に於て雙親の愛を味ひ且つホームの

娛樂を知れ恐らくは諸子が昨時膝下にありし日と大に其覺悟を異にするの感あらん。

古郷に歸る長者はおさなくて
庭のすもゝは年ふりにけり。

○薩摩琵琶に於ける疑　　優香里

しのぶ月の舍の主人いたう薩摩琵琶を好む、そのロングフェローの國舟を譯したる筆を以て三絃、箏を叱し去て優香里が平素好愛して措かざる尺八、笛をも攻擊したり、思ふに月の舍が琵琶を愛するは唱歌の巧妙なるが爲めに其耳は迷ふて波瀾抑揚に乏しき樂器の音調を愛するに至りたるものか、試に其唱歌を止めて單に樂器のみを彈ぜしめば如何月の舍之れを聞て涙あるを得るか果して欝憂沈隱の質に適するとするか偉大の感を起すとなすか、音調の點に付て薩摩琵琶を「その淒れたる音破るゝ如くにして且つ欝勃たるの力あり」と云はゞ余は尺八又は玉笛共に壯嚴にして靜粛もとより之れに添ふるの歌なきも人をして轉た悲憤の念あらしむと云はん、明月に對して之れを弄する時心神爽快、玉音沈む處身幽界に在るかと疑われ、忽然高く轉ずるの時心天涯に飛ぶの思あらしむ况んや一吹其連觀を引起すに於てオヤ。子房が簫曲は楚の猛卒勇將を泣かしめ齊武のエパミノンダスが角笛は英傑の綽々餘裕あるを示す、一谷に於ける青葉の名笛、赤壁の舟遊に吹く客の洞簫、さが野のむかし市原野のふる事も思ひ出べし此等の連觀は余をして深く笛を好ましむるものなり、世の淑女諸君唯だに清音好調の人に愛さるゝに非ずしてその風采に於てその言語動作に於て人を動すの力あれよ人の連觀を引起して昔時のハンナモア、マダムデスタルを今日に見るの感あらしめよ。誰れか月前の玉笛ぞや何人か清音涙あらしむるものぞ。

○悟りの歌　　山下石翁錄

悟さはしようじの引手みねの松ひうち袋にうぐひすの聲（古庶翁）
月影の至らぬ里はなけれどもながむるひとのこゝろにぞ住む
天津空くもりなきまで照る月のうつれるみづのかげも濁らじ
木の實をば猿に食はせて猿にまた此身くれせてもらふ猿ひき
泣はせで泣がほするを泣ながら泣かぬ顔してしばいみるひと
語るなど人に語ればそのひとがかたるなどとかたる世の中
おそろしき鞍馬愛宕の天狗よりなをおそろしきさとの小天狗
南無釋迦じや娑婆じや地獄じや苦じや樂じや何じや此じやと

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

いふは恐じや〱（一休和尚）

横さまにはふて敵へたかにの子に直にはへとはむりお親かな

横さまに親ははへどもさながらに蟹の子じやとは言れとも無

知らぬことを知つた顔していはしやるな口を開くと腸たが見ゆ

三寸の舌で五尺のからだをばやしないもする失しないもする

名に迷ふ人の心の愚さよ喰て知り給へおはぎ牡丹餅（一休和尚）

○冥途からお禮

女房亭主八公に向ひ此方の人今日はモウ盆の節季ですよお拂ひは何如なさるのですと云ふ、何も案じるに及ばぬ孔明の計略があるとて四斗樽の古いのを鏡をぬき中に這入つて女房をも蓋をしろと云ふ、何事ぞと問へば死んだ眞似をするなり掛取が來たら甘く斷われ、早や米屋は門口からわめき立つて來る此々と話せば人に鬼は無い夫は可愛相だと云つて帳を消して歸つた、女房も圖に乘つて居ると大屋の主人が咳拂しながら出て參つた、此度は女房も涙を絞して話せば大屋チイ〱と泣き紙入から十兩出して歸る、亭主そろ〱四斗樽から顏を出してコレ夫をヨコセ、聲が高いまだあれに居るがお、何構ふものぞと云つて飛出で十兩もつて酒屋へ行き酒をかつらへ八百屋へ廻つて大根五六本さげて歸ると途中で大屋にあつた、大屋は南無阿彌陀佛と念じて來ると八公が居る、八公はコイッ隱れる所ろはなしとあわて騷ぎ大根を頭まから冠つて居れば、コレ〱八公貴樣は先刻死んだのでは無いか、左樣です死にましたが余りお慈悲が有がたさに今ま草葉のかげからお禮を申しに參りました。

○瓢に入れし年ぜんさく

人の親心は闇にはあらねど子を思ふことは霜夜の鶴よりも深かし、世のおぼえゆたかなる寶もがなと明くれ物ねがふ母親むすめにむかひ、そちはつゝやはたちになる迄むすぶの神の御氣がつかぬやら似合しきものもあくことわりや亭をうむすべも知らいでトしかるを隣の人の内儀居あわせて女の子はそのようにあひだてなうしからつしやらぬものじやこれおまつどの今年二十にこそならるれ知恵もつく時があるにと云ひなためければこなたより生みの母が知て居まする娘は二十になりますといふ否二十だはたちだと同じとを爭さふ所へ娘のばゝ來りて孫が年しはおれがよい證據をもつて居ると隱居所よ

り大なるふくべをとりよせ、みな〳〵これで知れるといふ、これが何のしよう據になると聞けば、あの私が生れどしに此瓢があつて有たもし年穿鑿の時證據にと思ふて取て居た。

歴史は人をして賢ならしめ、詩は才ならしめ、算數は精ならしめ、理學は深ならしめ、道德論は沈質ならしめ、論理修辭は辯達ならしむ。

兒籃

○わるだくみ（第三）　草の屋

サアハ……ギットが……此間帽子をとり落した時に盜のに違ひない惡い奴とは思しがそれほど迄の惡人とは思わなかつた恐しい子供だそれだもの私の親愛するトムを意地の惡い人だの何のと云たノダ人の物を取て知らん顏をして居るような奴ダモノ私がジヨセフ、ギットのような惡人ではないとトムを辨護したその時は惡人とも思わずに口へ出たが今になつて見ると大惡人ダよし〳〵この衣物をズダ〳〵に破いて呉れようと着物に手をかけるその時ちようど向よりジヨセフ、ギットは一生懸命に此方の方へ走り來るそのあとよりはトムがギットをおつかけて來た見ると不思議ギットわ上着をちやんと着て居るがトムはシヤツ一枚だ私は何にしろ人の上着をとつて來たのダカラ目つかつては大變と思て隣りの家へ上着を放り込んで知らん顏をして教場へ歸て來た暫らくすると殘念な金の留計と眞珠入の釦がまた見へなくなつた事に氣がついて落した事と思たさて課業に就く可き鐘の音が鳴り渡つたスルト先生も既に教場へ來られたが待ちに待つたギットもトムも來ない教師は名簿を讀みはじめたギットさんと第一席のギットを呼だ前への時間には課業に出たギットが此の時間に居らん故先生も不思議そうな顏私も今さら心配上着が見えぬ故課業に出ないノダロー少し氣の毒にあつた然しさつきは運動場で上着を着て居たようダが何が何やら少しも合點が行かぬ先生はトムの名を呼だ居まいと思たトムは息を切て這入て來た私は少し安心したがギットの居ぬのがどうもまだ氣にかゝる人の物を盜むような奴だものと思ても氣の毒と云ふ感じに負けて仕舞ふ稽古も夢中で濟た歸らふと云ふ時に校長からムーアさんとトムの御兩人は話しがあるから御待ちなさいと云ふ命令が下つた、さては私しのたくみがわかつたと氣が附た氣が附くとそろ〳〵惡い事をしたと云ふ心が起るケレド先が盜人だもの校長さんが何を云ても勝つに違ひない……

教員室の戸を開て小使の案内でこわ〳〵這入て見ると縶たギットはしやつ一枚で上着をきずに立て居る傍らには泥の附た衣服が脱てあるその上に金の留針と眞珠入の釦がならべある私は五躰がふるへて強情物と云われたに似ず恐ろしうなつて來た此處ではじめて惡い事をしたと心の中に深う恥じたツットをあげてキットの顏を見ると目の中には口悔しなみだが浮て居るが日頃とちがつて美しく愛らしく見へた。

史傳

○安政江戸震災　　楠蔭老人

今は三十有餘年の昔となりしが思ひ出してもゾットする江戸の大地震、明治の姫たちは大方は知り給はじければ我れ見聞の始末を告げ申さん。

安政二卯年十月二日夜亥の刻——今の十時頃東南の方にゴウと遠雷の如き音聞ゆる間もなくドンと震上られソレ地震と云ふうちに一面の火となり叫喚すさましく四里四方の江戸阿鼻地獄と變化したり。

前年信州に大地震ありて江戸市民は一同安き心なく今にもあれ地震の來らんかと心ある人々はかたみに用意したるもありしが如何にせん非常の天變にて防ぎ様もなく見る〳〵江戸は八方より火起り夫は妻を母は子を助くる間もなく梁に押され火に燒かれ現在家藏財貨の灰塵となる涙と共に見るばかりか一夜の中に百萬の市民概ね妻を失ひ子を殺し孤獨煢人となりしこそ憐なれ。其頃の諸寺本山にて取調の寫を見るに、

一天台宗	二萬千五百餘人
一淨土宗	三萬五千七百餘人
一古儀眞言宗	一萬九千五百餘人
一新儀眞言宗	一萬七千六百餘人
一臨濟宗	一萬九千五百餘人
一曹洞宗	七千六百餘人
一黄檗宗	七千五百餘人
一日蓮宗	九千八百餘人
一同勝劣派	五千七百餘人
一西本願寺	三萬三千九百餘人
一東本願寺	三萬七千八百餘人
一時宗	三千七百餘人

〆二十一萬九千九百餘人

(右は少しく疑はしけれども手近に調書もなきまゝ暫らく是を借る但し卆歸あり)

二日より引續きて數日の間は日に何度となく小震ありければ人々安き心もなく地に疊を敷き或は幕を張り野宿の有様にて心強き男子が盜難を防がん爲め夜に入り家に臥せど夫すら入

口に近く眠りて今にも搖もどしあらばと逃る支度をなすほどありし。かゝれば四五日家に入あきも盜に入るものもなく常は竹刀の癖を自慢する若者も天災に刄向ふことも出來ず流石に婦童の如く南無阿彌陀佛を唱へざれど心の中に八幡菩薩を祈念せざるはなし。われも幕下の一人なれば我家をも顧みず早々に御本丸に出仕しけるに諸大名小名をはじめ一同甲斐々々しき扮裝にて將軍家を護衛したるは勇ましく、中にも御師範の何某（今猶は現存し下谷に住む）などは火事裝束に身をかため桃山の鬼上官と云ふ見得にてありし。

市中の慘状は安政見聞誌等に詳しければ大分は知り給はんが中々に今想像する樣にてはなく目も當てられぬ計なり。わが隣邸は何の何の守と名乘れる旗下にて内福と近所の評判高き人なりしが主人は此地震に祖先重代の茶器とやらを出さんとて土藏に入り空しく生埋となり内室は是と知らずに枕元の有金七百金計を袋に入れ首に掛けたまゝ走り出で外圍の溝を越ゆる時其中に落したるを心附かずに逃延び漸々に落付きし時氣が附きて覺へある溝を索せしが誰人か持去りしと見へてあらざりしと。一夜の中に夫を失ひ財を奪はれ家藏は滅び悲歎に沈まれしさま氣の毒にてありし。

十日計も過ぎて市中もやゝ靜まりし時判じ繪等の摺物數多出版になりしが其中面白きを抄錄すべし。

萬歲樂のつらね

東西南北四夷八荒天地乾坤の何れの土地も動ざらんや遠からんものはたよりに聞け近くいゆつて口に泪神無月を幸ひに家藏堂社をゆりこわし大地が裂て此世から奈落へ沈む阿鼻叫喚野宿する身の苦は病五七が雨と降りかゝる涙の硯の水ぐきに地震の歌をしか〳〵と栃の素袍や大太刀を借の衣裳の成田屋もどき罷出たるそれがしは鹿島要之助石座といふ神童南瞻部州一ぱいに尾ひれはバするのらくら者鯰坊主はめ吉例の顏見世ちかき十月二日もう足からい磐石と踏かためたるわしはら皇國ゆるがぬ御代の萬歲樂此のちさまたげひろぐなら筋骨なしのかばやきになして凡夫口へほうり込むとホゝ、納てまうす。

逼迫地震（相生獅子の替唄）

魔が飛び吉原とゝろけども江戸へらず誰もまどうやさまざまの地々めり〳〵と只ゆれてその物音ぞあわれなり塔よお堂よせめてしばしい地に留れて見返れバ山の木かげに逃げつかくれつ人々の姿かなしく泣く子たち「こゝろづくしのな此世の愛おへいつか世界もつきるやと心一ッにさわぐやらうしや世の中「はりにはさまれ桁にふしチいてゝア痛てのわなたへゆらりこなたへぐらりゆらりぐらり〳〵〳〵と道まどふひッしきく〳〵じきのちん〳〵の足拍子はそれで誰々も心亂れてたちも止らず叫ぶ人の妻には内義もしら涙のこくふに逃ぐるかお德なり「町の惣ゆれに家根〳〵を見渡せば折しも東風のいともするどく吹まとふぐわら〳〵どつとどれもゆれいるはおちもこそすれ一トしほさてもおそろしや又は程すぎす虛空に移る火の早さ「ゆだん借家はわっちへなこつちへなわちへこちへすじりもぐりてめり込む近所の奧藏のかげに路次といふもの誰もしるものをむでやの何事ぞ内も傾ぶくぼろ〳〵壁のつらやうらめし燒るにやまさる見るも魂消る朝ぼらけ「一ト夜しのげばわが身い死なじたるをれしづみし家の内死人重なるさのむさゝやんれそれはそ

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

れはへまことと見りやつらや思ひ廻せばむざんなり野陣に只ぬれ疑くの遊げに早速のありさまへみやう火の花なり樓廊命庫もゆうべの雲と消へうせて日前の不足わまたなり」せわなく燒かせ給へや燒亡の時節も今咲くほどによめ消へじ「丑寅邊の婦廓も微塵何の花の坐二階みし〳〵大へん異變の地しんかしら上手や田町や惣田甫〳〵廣原の土みな割れて穴に砂わぶれ道に石まろびげにも上なき國土の災わひ歎かぬ人こそなき時なれや萬歳楽とぞゆり納め〳〵治世の坐にこそあはりけれ。

附て申す、右は長唄稽古本と同様の仕立にて表紙には相生総を使ふ鬮わりて大輪に重ね瓢の紋わり、らんえ鹿島屋総瀬ゆり附不時聞糊謎郎とわり其他すべて稽古本に擬したるものにて如何にも能く出來たり。

其他大津繪節端歌の類かず〳〵出來たりしが中には「ゆり出し」と稱する樂も出來て効能書など最も面白し。又如何なる滑稽家の作にや知らねど次の申渡はわけて面白く見ゆ。

鹿島神詫所より鯰共一統へ申渡しの事

鯰共の義は古來より申渡し置通り九は病五七か雨に四ッ日でり六ッ八ッなならば風と知るべしとの御詠歌を守り罷候不順の折を見合せ質素に渡世致すべき處諸神いづもへ御出仕の御跡にて先例の掟をそむき御府内近在とも亂暴致し家藏身代をゆすりちらすのみならず同類の出火を誘ひ出し格別の風も無之に數ヶ處燒拂候段八百萬の神を恐れざる致し方ふらち至極につき四ッ手を以て一匹ももらさずすくひわげ滑やき所に於て大道さきの上火わぶりにも行ふべき處格別の御慈悲を以て日本六十餘州追放仰付らるゝものなり若し此のち御構ひ場所へ立よりいたぶりがましき義有之に於ては早速地引を以てからめとり急度酒菜に行ふべきものなり。

太平元年をち月十日日

鹿島の神託は終に地震を追放するを得ず、三十有餘年を經たる今日さしも堅城の聞ある熊本の壁を崩壊したり。火事防ぐべし雷は避くべし卒然として大地の震ふに到つて人工如何ともする能はず。常は堅牢と保険の附きたる土藏石屋も須臾の間にむかしの榮華の戒と爲る、恐るべき哉。

江戸震災の統計次の如し（當時の記錄に依る）

一町數　五千七百八十丁餘崩

一御邸　四千百二十五軒損

一寺院堂社　一萬二千百二十ヶ處

一土藏數　七百五十八萬六千四百三十二ヶ處

一死人數　十二萬七千五百餘

（其時分の不完全なる取調にて諸家の記錄を見るにまち〳〵にして不分明）

御救小屋の出來たるは次の三ヶ處、

幸橋御門外　淺草雷門前　深川海邊新田

公儀の御救助の外有志の面々も各々分に應じて金銀米穀を施與したりしが多數の事なれば中々に行屆かず引續きて大風雨洪水等の大災ありて江戸細民の難澁申すもおろか例ふるに程なし。われと同じく其慘狀を目せし故老たちは定めし其實境を知らん、ヱフオー長明の逸筆あらば長く世に殘さんものを。

小説

○冷熱記

第一章　山

北邨俊士錄

殘暑の嚴しきに終日在して讀書も出來ず、只だうつら〳〵と暮して早や夕方となれば、晝の熱さを拭ひ消すとか冷しき風吾れ後れじと吹來り、吾が家の爲めにも亦た全日の苦を拂ひ淸むと見えたり、初めて安き心地し、客あらざれば妻と二人食机に對して夕餐を取りぬ、今朝の新聞紙には、彼の衆議院解散の後ち、自由派の壯士非常に激昂して粗暴の企だてありしとか流言され、三百餘人一時に退去の命を蒙むりたる事に付きて樣々の新報ありしかば、妻は之を言ひ出で、其夕の物語りと爲しぬ、固より都を離れて往來する人とては僅かに指を屈むる計り、大方の有志者も今は吾を忘れてか訪ひ來たりもせず、亦偶たま來りて吾說を尋ぬるときは吾れ特に笑ひて之を避くるやうに爲せば、世人は既に吾を目して隱遁の書生とこそ言はめ、われ亦之に甘んじて未だ世に出んともせず、自づから世情に遠ざかる憾みはありと云へど、四五の友人は尙ほ屢ば來訪し、左なくも月に一二回は細かに政治界の樣子を知らせ越すにぞ、北京五六の新聞社長より送り越す新聞紙の外に遠く內閣議會なんどの事情を推知する便り少なきにあらず、而して吾見に倦みしとき相語らふは妻の外になく、妻は能く我志を知りて吾が爲めに汎ねく歷史を涉獵し、亦た英、獨、魯の小說を主として吾が爲めに讀みて與れゝば、之によりて助けを受ること至りて多し、妻はわが研究の折の仲間、討論の時の相手、調査の事務の秘書官なれば、日々相語りて益する所ろ樂しきほどなり、此日も思はず長く話して早や夕日西の山に近くなりぬ、今ぞ例の如く散步せんと云ふに、妻はまだ鷄を鳥屋に納れ、洗物を片付ねばならず、且つ明朝の遠馬の用意未だ調わぬにより、今日のみは氣の毒ながら吾れに獨り行けと云ふ、然らば吾も亦家に留まらんかと思ひしが、何んとなく心地滯うり、切りに山を見たしと思はれたれば、妻を慰さめて獨り家を出でぬ、切めてリ、一ル殘し置んかといふに、否あのやうに出でたげにすれば矢張り伴なひ玉へと云ひつゝ、鎖を解けば、躍り上りて吾より先に飛行ぬ。口笛を吹き、杖を振り、思はず急ぎ足に步めば早くも高島山の麓に到りぬ、木影鬱として陰らく、涼風新たに生じ、露すでに梢より滴たるゝ心地す、特に流れの音潔ぎよく響き、泉涓として神を澄ますの思ひあれば、步々高く登りて小徑を分

け行きぬ、リヽーは何んとなく恐ち氣して吾が足に纏へば、叱と命じて數十歩さきに杖を投ず、リヽー頓かに勢ほひ生じ、踴躍して奔り掛れば、すでに梠につきし鳥も驚ろきて飛び立ち、啞々として鳴き叫べば、功名らしく杖を喰へたるリヽーは逸早く吾が許に持ち來りて、又高く空に向つて吠ゆ、其聲滿山の空しき谷々にひゞきて物すごきと限りなし、吾いたく斯る景色を好めば、滯うりし頭らの爲めに淸められし如く覺え、甚はだ爽快になりてます〳〵上に登れり、日は全く暮しや否や只だ木の間もる天のうつろひに道の筋かすかに見ぬ、シテ草路はいつのまにか無くなり、角ある小さき石多く落々として横わり、直ぐ其の傍わらに泉の水の音高く流るゝにぞ、吾は之によりて道を認ため、石を飛びて尚更らに深く分け入りぬ。

高島山は左して大ひなるにあらず、嘗て木樵に聞しに、近道を通りて巓き迄て凡そ二里ありと云へり、たゞ樹木茂りて見すかし難きに、間だには尙ほ野葡萄、かつらなど四方に蔓延して狐すら自由に通りがたし、麓より半里の所ろに稻荷の社あり、此處迄は村人の參詣に便りして可なりの道あれども夫より上は只だ一條の小徑存するのみ、木樵之を稱して近道と云ふ、山の巓きに石垣にて築きし廣き臺あり、之に對して麓より大ひなる坂の通りてありし如き遺跡所々に存するを見れば、昔し大方は何人かの山柵などありしならん、小徑の外には泉の流るゝ道あり、之を除きては難なく登るべき便よりなければ、人好みて遊ぶ所ろにあらず、吾は妻と共に屢ば稻荷の社あたり迄は來たれど、妻の爲に計りて其より上に登りしとなし、今日はわれ一人にてあれば平生の好み頓かに欝勃して禁じがたく、たゞ上へ〳〵と足を向けぬ、われ好ましき山水を見れば、只だ前途を望んで進み、顧みて思はず脊に汗すると屢ば〳〵なりしが、此日も亦た後にて思へば慮ばかりなき暴進にてありけり。

凡そ深山には一種の靈氣あるものなり、すでに尋常人の到らぬ所ろに到り、四面に聲なくして幽邃寂寞たるの境に入れば、聲なきの裏に一種の靈ある聲かすかに聞へ來り、沈々たる寂寞の下に何やらんザワ〳〵としたる響き幽に起り來る、此時梢に風なきに寒むき風颯々として音を揚げ、氷の如く劒に似たるツメタキ觸れひやり〳〵として吾が頰にあたる、感じ鋭どくなりしや果た鈍くなりしやを知らず、恰かも羽化したる如く、亦た夢見つゝある如く、神氣冷々淸々として、見るに

てもなく、聞くにてもなく、何やらん幻の憤どふるを見聞す、云く汝ちは如此き所ろに來るべきものにあらず、從には汝ちの同類あるべし、亦汝ちに見らるべき山水あるべし、此處は吾黨の遊び居る地にして人間の侵すべき境ひにあらず、直ちに立去らざれば汝を狂せしむべし、然らざれば汝ちを化して吾黨の仲間とすべしと、吾れ思はず此の聲を聞く心地して俄然として勇生じ、山怪若し靈あらば吾れ汝ちに面會せん、吾は汝ちと握手せんとを欲する也とて、突然大笑すれば聲ひゞきて谷に入る、りゝーは驚ろきて吠へたり、吾又思はず微笑し、彼が頭らを撫でゝ高く口笛ふき、いよ〳〵登る。

早や全地黑くなり、ふくろふの聲あひま〳〵に聞ゆ、遙かに瀑の音はすれど足元の泉の聲最早耳立たずなり、少しく疲れを覺ゆると同時に妻や煩らひて吾を待つらんと思ひ出しぬ、嶺に達せぬは殘り惜しけれど、率ざや早や歸らんと思とき、不思儀にも一條の光り山霧に映じて太とく朦朧として見えたり、愕然とはしつるが動氣靜まりていよ〳〵膽力定まり、昔しより狐狸の業など云ふはあれど皆な人の恐るゝより生ず、眞とに狐狸人を迷はすとなしとの道理は知れざれど未だ確かにばかされしと云ふ人も聞かず、何れにせよ斯る折は面白き

時なりと喜び、之よりは草も荆も容謝なく踏わけ折り曲げ、只一文字に向ひゆけり、此リ、ーには實に苦しき日なりけり、彼は研究の念も好奇の念もあらざれば、主人の物ずきには甚たく閉口やしつらん。

道開けて思はず到着したるは門の如き處ろなり、何如に此處に寺やあると思ひてキット見れば本堂らしき處ろより蠟燭のあかし折々にちらつくなり、其光り庭の方に全映して入り口の方を照らさねば吾には反りて便よく掛念もせず這入りたり、庭は荒れ果てゝ後しろの森と區別する所ろなし、たゞ草高く茂り乍らに凸凹あるぞ、昔しの築山泉水を形どるならめ、凡そ人は人間にとりて尤ともにぎやかなる動物なれば其人の住ひし屋、用ひし家具などを見れば、自づから友ある心地して春めくものあり、左れば深山幽谷の裏にも若し人に遇わば最早幽深の心地せざるものなれど、之に反し既に人失せぬと思はるゝ廢家又は破れ具を見るときは、反りて一層にさびしく感ずるなり、然れど吾には此時左樣ある思ひ少さかもなく、只だ何事ぞと奇しむ計りにて直ちに本堂らしき所ろに近づけば、發矢、不思儀なり、風吹きて人の大ある聲するを聞きぬ、一人二人にはあらず、多くの人あるらしき聲をきゝぬ、而して亦た寂然再たび音なし、われリ、ーを撫でゝ其口を抑さへ汝ち吠ゆる勿れと命じつゝ耳を欹だてゝ聞けば、風のまにまに斷絶して一二聲亦時に高く聞ゆ、特に余を驚かせしは……爆裂彈……雲非縣……と云ひける聲にてありし。

己れいよ〳〵奇しみ見まわせば庭のあなたに恰好の丘あり、彼處にひそみて見下さば集まりし人々の面てや分らんとて、リ、ーを叩き靜かに立出でゝ門より右に曲り、水なき溝を渡りて、木に椅りて登れば、丘に三四の大木ありて甘く其の後ろに密るゝを得べし、則はち安んじて眼を抑へ彼方を見れば此は如何に十數の異形物左右に相列し、中に五六本の蠟燭を一つの台に打立て、七八瓶の西洋酒めけるものを程好く散らし、或はあぐらかき、或は立ひざし、或は腕まくり、或は足を投げ出し、何れも粗暴に見ゆる丈夫らしき男子なるに、顏は何れも眞黒にて墨ぬりしと思はれ、たゞ眼光の炯々として光るのみ。

此夜炎暑不可當　出門高樹月蒼々
天河只在南樓上　不借人間一滴凉

寄書

勇論

在廣嶋　蘇山

人は正道を踏む可きなり正道踏まさる可らさるなり若も正道の踏む可く踏さる可らさるを知らば忍耐無る可らず勇氣無る可らず勇氣能く忍耐を扶て忍耐能く勇氣を生す是れ諸の障礙に忍て正道を踏むに勇なる所以なり夫れ勇に大勇あり小勇あり酔て而して闘ふ者勇なり狂して而して命を忘る者勇なり力鼎を扛ぐる者勇なり固執動かさる勇なり千軍萬馬號令の下に動く勇にして金城鐵壁の砲聲と共に砕く勇なり一睨の能く人を辟易せしめ一言の以て人を抑壓する亦勇なり山を以て池となし海を變して陸となす勇なり辱を受け怫然として怒り人棰鞭を加ふれは身を挺して起つ勇なり彼れ之を以て來る我も亦之を以て酬はんとす勇なり而して眞正の勇は此にあらず我之を勇の小なる者と謂ふ酔者は酒の勇なり命を恐る狂氣の勇なり鼎を扛ぐる手足の勇にして固執動かざる頑僻の勇なり軍馬を動すは法則の勇なり城壁を砕くは機關の勇なり辟易せしむるは殘酷の勇にして抑壓するは爵錄の勇なり陸を移して水となす財寳の勇なり其怒に過ふて怒り其辱れて撻つ血氣の勇なり是れ皆形の勇にして假て以て己の勇となしたるなり故に時として其勇を失はさるを得す殷紂の力鼎を扛るも妲己に勝たず歴山の足歐洲を蹂躪するも杜康に勝たず鍾馗の勇玄宗の爲めに鬼勇を振ふも沈香亭北の妖鬼妃を攘はず忠盛の勇上皇の爲に妖怪を捕ふも祇園祠畔の魘姫を捕へず瞽叟の頑も舜の爲めに姦に格らず清盛の暴惡猶ほ重盛を恐る項羽の狡智樊噲を使ふ能はず忍必烈の雄勢文天祥を服する能はずマルテンルーテルは日耳曼の執彈を意とせずリクラスはカルセージの虐刑を怖れず少年の股韓信に跨るも而して其勇に跨るを得すマンチセニースの杖ダイオゼ子スを擊つも而して其精神を擊を得ず斯の如く小勇は時として勇の如く時としては法の如くならざるを得ず然り而して其正道を踏み障礙に觸れ撓まず屈せず終始一の如き者已れ其不正を確信せず恥ず懼れず飄然として正道に轉する者唯大勇に非れば焉んぞ得べけん邪若も勇大ならん乎小勇決して我を害する者に非るなり小勇は形にして大勇は無形なり形は屈するも無形は屈す可らず勇の大小照々として其れ明なり然るに天下眞勇を知る者果して幾何かある是故に小勇は常に我を擒にせんとす我は我大勇と我忍耐を以て之に禦らん耳。

○上泉まさ子の死

明治女學校一友人

愛友まさ子忽焉として逝けり、人世は夢幻、人は朝露。荒漠たる罪惡の原野に陰々たる死の凄風、峨々たる誘惑の險山に滔々たる情慾の濕聲、落膽の沼、涙の谷、不義の激流、放蕩の丘岡共に吾人が眼前に横わる、余は愛友の死を聞て涙あり、或はこれ夢あるやを疑ふ、嗚呼夢ならざればこそ悲哀の念あり、然れども君既に人世の夢覺めたり、君は朝露に比すべき者に非ず、君は行步艱難の徑路を旅し終われり、君は既に濁世の人に非ず、世の眞相を知るに於て余は大に君の爲めに安ずる所あり則ち歌つて曰く

この世はながるゝみづよりはやく、
　人は野邊にさくはなよりはかなし。
いま世を去りにしわいするともは、
　さかえのかむりをうけてよろこばん。
世にはまたわわぬわかれにあへど、
　主によりてしのびみむねにまかせん。

上泉收子は明治女學校生徒にして温厚博愛之淑女、校友の交り教員の信用厚かつたりしも昨年來肺患に罹り遂に去六日永眠せらる同子の事に付ては記す可き事多し履歴詳細聞糺しの上本紙に寄送すべし。

左は過日華族女校卒業式のありし時黒川千春子が述べられたる佛語の謝辭なる由。

On ne saurait trop remercier Sa Majesté l' Impératrice de Sa gracieuse visite d'aujourd'hui et de l'auguste bienveillance dont nous sommes l'objet de Sa part, mais je suis encore trop faible en Français pour pouvoir Lui témoigner toute la gratitude dont mon coeur est si profondément pénétré.

Cependant, en ce jour mémorable j'ose prendre la liberté d'exprimer mon impression et mes voeux pour l'avenir.

C'est vraiment un grand bonheur et une gloire pour moi que de me trouvet rangée parmi celles qui ont eu l'honneur de recevoir un diplome devant Sa Majesté, et je dois reconnaitre que, si j' ai pu obtenir un tel succès, ce n'est que, grâce à l'encouragement et à la haute protection de Sa Majesté,d'où résulte la vigilance éclairée de Monsieur le directeur et de Madame la directrice, ainsi que les bons soins que tous mes professeurs ont pris de mon éducation et de mon instruction: je crois donc qu'il n'existe aucun autre moyen de prouver ma reconnaissance envers Sa Majesté, que de toujours suivre la voie qui m'a été tracée, c'est-à-dire de m'appliquer à accomplir les devoirs qui m' incombent, en pratiquant le mieux possible les préceptes qui m'ont été enseignés de faire tous mes efforts pour étendre mes vues, agrandir mes idées, élever mon esprit et fortifier mon jugement, afin de devenir simple et modeste,d'avoir enfin ce tact qui est la sauvegarde et le charme de la vertu.

C. Kourokawa.

Le 18. juillet
de la 22 ième année de Méiji.

新報

○風評三十日

浮評は七十五日と云へど、彼の高等女學校其他に關する風評の如きは、前後凡そ三十餘日にして滅したり、思ふに今まに至りて尙ほ執念く信ずるものあらざるべし、特に幸はひなるは各女學校の生徒四方に散じ、皆なそれ〲の地方に歸りて生きたる辯護人と爲れり、彼等が確かなる保證によりて地方人の誤解は明白に霧散したり、霧散じてのち太陽の光は一層にやざたり、吾人甚はだ之を祝す。

○正誤の勇

惣べて東京の一音は地方に行いて百音に響く、故に女學校攪擾に關する謬説の如きも、田舍に渡るといよ〱遠くしていよ〱妄説となれり、彼の能勢榮君を以て女性の名なりとし、奥羽近邊に於ては、矢田部校長と敎頭能勢女史との間に怪しかる事のありしやうに信じたるものすらあり、以て迷信の一斑を知るべし。左れば地方の新聞紙の如きすら尙ほ往々之に誤まられ、一種の人々が東京より故意ありて通信したる妄報を其儘に掲載し、爲めにいよ〱誤まりを傳へたるの跡少なきにあらず、千葉に於ける東海新報の如き亦誤まつて之に陷いりしものか、去月其紙上に於て「豈唯高等女學校のみならんや」と題して掲載したる一雜報の如きは、先づ高等女學校に付て有まじき事を記したるのみならず、府下に於ける有ゆる基督敎女學校に向つて非常の惡説を負はしたり、而して大阪の東雲新聞、名古屋の金城新報は端なく亦之に誤まられて其全文を盲信し轉載したり。左れば櫻井女學校、明治女學校、東洋英和女學校、海岸女學校等の校長は之を餘りの事に思ひ、連合して之を訴へんとせられたる由し聞及びたるに、東海新報は元と確かなる出所ありて之を掲載したるにあらざれば、之を謝して二度び正誤し、近日に至りて亦た大に正誤したり。

○地方の遊學者に告ぐ

之を以て吾人は今亦た更めて地方の父兄諸氏に告ぐ、一二の風評によりて乍ち子女の就學を中止するは非常の失考なり、願くは今日安んじて其の愛嬢を留學せしめよ、諺に之れあり、雨降りて地固まると、既に之迄に雨を要するの事はあらざりしが、今後の東京女學校に更に一層の安固を買得たるとは實に明らかなり、故にますく掛念心配すべきもの減ず、當にいよ〱切要なる女子敎育に熱心して可なるべし。

○夏休中の學科

暑休は休むにあらず思を轉ずるなり、故に只だあつしく〱と云つてゴロり〱寢

て居ては、學生暑休の目的を誤まる、或は郷に歸りて父母を省し古老に問ひ、又は近野に漫遊して古跡名境を尋ね、又は草花昆虫を集めて生物學の研究に助けし、又は有志名家を訪ふて識見を廣ろむるなど、爲すべきと樣々あらん、特に女學生の如きは此際母の膝下に居て家政の扱ひ方を實見し、學校に於て學びたる事を適用し見るなど甚はだ有効なる心得たるべし、冷風の來るは瞬く間なり、諸君夏日月を徒らに過す勿れ。

○女生の修學旅行

是れ又た有益なる暑休法たらん、吾人嚮に其の大畧を報知したるが、今ま旅行に與かりたる教員某氏の言へる所ろを更らに値聞するに、

山梨縣尋常師範學校長井手今滋氏は靜岡外一府三縣の學事視察の命を帶び傍ら女子部生徒十五名及び職員男四名女子二名を引率し生徒をして實地學事視察の爲め旅行し去三日其歸途文部省へ午前九時過き出頭し一同同省樓上の高等官應接所に於て榎本大臣辻次官等出席面議の上旅行中の談話を聞き大に此擧を賞贊し女生徒へ氷水等を與へしよし此一行は去七月二十日甲府を出發し富士川を下り岩淵より汽車に乘し靜岡に着す職員中女子教員は專ら生徒の宿泊其他の順序取締を爲し男子教員一名は理化其他の學科の實地研究等に從事し同一名は書記に他の二名は幹事及び書記にて一行の取締庶務に從事す此の職員は宿泊の男女の居間を隔絕せしめ井手校長は歷史上實地の講究を兼ね總て之を監督せり此の一行の靜岡に着するや同地の師範學校職員は停車場に送迎し殊に女子師範學校生徒は雨中を厭はず一同送迎し送別の國歌を贈る杯頗る歡待を盡せり愛知岐阜の如きも校長の舊知己多き爲め優待頗る至れりさ云ふ京都府に於ては大宮御所を初め舊都の跡を一覽し其他歷史上の遺跡を歷覽したり伊勢は大廟に詣するを主とし傍ら文學の研究の屈强地たるを以て旅行中最も肝要の目的さし且つ山崎三重縣知事は曾て山梨縣に知事たりし緣故あるを以て歡待最も至れりさ抑も女生徒の修學旅行の如きは本邦教育歷史上未た曾て見ざる所なれば人或は之を見て如何の評を下すものなきを保せずと雖さも山梨縣の如きは山間の僻陬にして見聞頗る狹隘なる土地柄なれば此の實地旅行に於て益を得る決して他地方の比ならず是れ他の批評を顧みず敢て此擧を爲せし所なりさ。

○消夏清風　　ふ、ち、

國民之友附錄はいつも面白し、わけて五十八號の附錄は一としほかさ思はる。いづれも堂々たる大筆、敬服々々さ贊歎の詞より外に一言の發すべきなし。

お母影の各篇悉く金玉の文字、作家英獨和漢の學才ありと覺ゆ、心惡(こゝろにく)しく〳〵。鬼界島の長篇最も佳。

眞夜、紙さ眞似のなき篁村先生近頃の傑作。趣向は宛然たるツルゲーネフにてうれし〳〵、篁村先生に於て稀に見る處。

消夏漫筆、われ是を讀んで背(せびら)の汗(あせ)を忘れたり、思軒先生の文字アイスクリームより愛すべし。但し「探偵ユーベル」より面白くなし。咄、木綿と絹を一括して評するか。木綿に絹の美なきも日用萬事に欠くべからず、消夏漫筆は後生に與ふる材料ならんか。

流轉面白し、趣向は何處となく露西亞小說の風あり、我等此種の作を喜ぶ。いづれも宏評の加ふべきなし共に文學の師表さならん。追て細評を試むべし。

○田舍に入て彌よ膨脹す

曩に小呂局促さ題して甚たしく政黨の爭ひ激烈なるとに歎きたり、然るに更に亦た新聞紙の報ずる所ろによれば彌よ其の激烈なるを見る、日本何ぞ眼孔の小さきものうとく〳〵さするや、

石川縣に於て政黨軋轢の甚しき事は先頃の各新聞に見えたる大同改進の兩橋な互に相通行せざるにても知るべき事なるが是も矢張同縣下河北郡高松にて有りし事にて此程の事なりさか相撲を興行したる節木戸番が一々入り來る客に向ひ「貴客は何派です此角力は大同派の人でなければ見物させないのです」と斷われば客は「ナニ夫れでも木戸札を買つた」さ云へは木戸番は押返へして「ナニ左樣な客はありません大同派の人でない人に札を賣りサウナ事はありません宜から御歸なさいグズ〳〵すると叩出すぞ」さて他黨派の人には一切見物させざりしとの事なり

○東京新聞紙

吾人は諸君に向つて忠告せざる可らず、諸君近來切りに條約改正の事を論じ、或は內閣の運行を想像し、或は高官の贊成不贊成を想像し、或は質て見たり、正說して見たり、慷慨して見たり、泣て見たり、くどいて見たり、必竟たゞ幽霊に向つて說法し、死人を捉らへて威張るか如く思われ不瀞にたへず、條約改正は國家の大事なり、正々堂々愼密嚴論に之を論ずるは固より吾人の望ぶ所ろなりと云へど、今の如きイサカヒは實に恥かしきとにあらずや、夫も諸君同士仲間にて爲すは宜し、左れど外に向つては諸君はお客のあるものと覺悟せざる可らず、吾々日々諸君の顏を拜見し、いつも〳〵同じ御面相を見せらるゝには甚はだ迷惑也、今

は、更に俟、ちさ冷淡潔白なる風采を猫がいたしさこそ祈るものなる。

○地震洪水は何如ん

諸新聞紙諸君、暫らく爭ひを止めて彼の洪水地震を見よ、前年一ノルマントンの沈沒せしさ、多少の水害ありしさとにすら君等が信切なる心を動かしつるに、今日に於ては最早此般の事に着目する余暇あらざるほど乎。

○遠　近　大　小

一二の有志家は切りに熱心して米國ジョンストーンの水害に慈惠金を寄送せんさするよし、驚ろくべき顚倒の事と云ふべし、黄金多く、助け手多き米國に惠み金を興へんとするは、寧ろアフリカの土人にでも與ふるの優れるに如かざるに、特に本邦に於てすでに見るが如き大洪水の損害汎濫さして延碍したるものを。

○衒　聞

傳聞すらく、某等「衒聞」と云へる雜誌を發行し、顯官紳士逐務時の言行に關して直筆する所ろあらんとすさ云ふ、嗚呼此れ何にの目的ぞ、若し貪利慾益の考へにてあらば辨ずるも栓なし、苟くも道の爲に計らんとするものにてあらば、其の志は反りて世を害するとさなりて止まん、顯官紳士は固より何等の種類の人さ云へども其の現時の言行に對して正々直筆すべき者多し、何も殊更らに其務時の惡を暴露するに及ばず、死者をして死者を葬らせ、過たるは之を土中に埋めよ、吾人が尤もつさむべきは今日の現時也、今日の現時に於ける人々が言行こそ筆を立て墨を飛して直評せざる可ざるもの也、アダムは墜落し、猿猴は先祖さなり、幼なきときは人の頭までをもナグりたり、蓋し此等よりも猶茂り靴ひかる今の紳士の今に付て言ふべき所ろ多し。

雜　之

○華族女學校規則　改正せられて去一日布達せられたり、初等小學科三年、高等小學科三年、初等中學科三年、高等中學科三年、にて一週大抵二十七時間乃至二十九時間なり。

○明治女學校高等科　其廣告前號及本號の本誌末にあり主として講義昧を勤らるとよしなれば學ぶものには便利多かるべく必らずしも多くの學力なくても入科せらるべし但し現に敎員となり居る女生などにて之に入學せんとを申込めるものあるよし。

○百五十餘年前舶來の「レース」「レース」の西洋より渡來せしは開港以後のことならんさは雅人も信ずる所なるが上京區元廿八組役行者町の者行山が去る廿四日祇園祭禮の際に装ひたりし「見送り」を見るに幅五尺、丈け一丈許りにして花鳥の模樣ある間違ふ方なき綿「レース」なるが該町にては此「見送り」を名附けて「綢の見送り」さ稱へ祭禮の際雨天なれば此れを裝ふの慣例なりといふ或る鑑定家の說に依れば右の「レース」は恭し今を距る百五十餘年位の昔日に舶來したるものならんさいへど如何にや(七月卅一日中外電報)

外　報

○串田茂子孃　當時米國桑港に滯在する同孃は今度ウィラード女史の紹介を得インヂアナ州リッチモンド女學校に入學さるゝよし。

○婦人參政權問題　英國に於て同問題の益々盛んさなるに付きて反對者も亦漸やく起る有樣の處ろ近比ろ數多の有名なる反對者連署して其意見を公にし所云る著名の人を表示して威を張はしたり、之に付き英國及米國に於て亦た同論賛成の人々之に對して一樣の處置を爲し近比人目を惹けり。

○シカゴ女陞大學校　は益々隆盛にて手狹なれば今度新たに二萬弗にて一校舍を新築し更に二百五十五人の入校生を募るさ云ふ。

○冷猥廣告文條例　冷猥なる廣告文取締條例は英國に於て最早や上院を通過したり追て更に下院に廻りし上にて發表せらるべし。

○ロンドン貧民　英國の主府ロンドン市中にてたゞ一室に住居せる貧民十六萬三千人あり(一室にすら住まはず穴居の如きをするも亦多し)さぞ。

○公主の降嫁　皇太子殿の增加と題して頻に電報英國より來たる英國皇太子の皇長女ルイス公主緣組の事に付きては同國にても世評甚た喧しき由なるが皇女の人臣に降嫁するは英國に於て嚆矢なりとて勤王黨の面々は異見を抱き其新聞抔に二十五歲の萬代荷酌の姬か四十歲の脊低斯格蘭人と十四世紀時代のプロレンス風に戀ひ焦るゝさは不思議など頻に誹謗すれども實際今の女皇陛下には皇孫男女合計二十三人あり而して歐洲諸國の王室名家中英の皇室と結婚するを得るものは纔に六家あるのみなれば臣下をして之に尙するを許さゞらんには是非尼寺へ送る樣の事に至るべく今度の許嫁は實に時宜に適する處分なりと有識者は稱賛せり但し公主の夫ファイフ伯(今は侯さなりぬ)は一歲の入額四十萬磅に過きされは皇族と緣組して花々しく世を送らんには頗る骨の折れるとなるべしと六月三十日倫敦發の通信に見ゐたり(東京新報)

○倫敦の虐殺　昨年中倫敦ホワイトチャッブルに於て娼妓が殘酷なる殺害に逢ひしこと數回に及び遂に時の警視總監をして辭職せしめたる程なりし事は今尙世人の之を記臆する所なるが今又香港デーリニュースに載せたる七月十九日倫敦發の電報に依れば同所に於て又一人の娼妓が暴殺せられたりさ見ゆ其の暴殺の模樣は知るに由なきも是亦昨年の者と同樣の事ならんか。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

廣告

看病婦學校生徒募集廣告

●本校學年ハ明治二十二年十月七日ヨリ同二十三年六月下旬ヲ以テ終ルヲ第一期ノ始ニ有ラザレバ入學ヲ許サズ故ニ九月一日迄ニ必ズ中込ヲ爲ス可シ●教授法ハ講議口授臨床講議等看病ノ爲メ必用ノ事ハ洩レナク教授ス●毎月食費金貳圓ノ外要セズ但シ炭油部屋教科書病室用服等總テ本校ヨリ給ス●學則校則入學志願手續書等望ノ方ヘハ和渡ス可シ若郵便ニテ中込アラバ直ニ送附ス

京都烏丸通京都看病婦學校

東洋學會雜誌第二編第七號目錄

七月二十八日發行

理學門 史學門 文學門 寄書 雜錄

荀子ヲ論ス……（承前）……瀧川龜太郎
東洋暦法、支那暦ノ沿革續……椿 稻
東西洋歴史の異同を論じ併せて世の修史家に質す……松本胤
隨意荘にあそふ記……小中村清矩
初郭公 歌六首……落合直文
樂府……近藤眞琴
晃山紀勝……中島幹事
井上毅氏の漢字製作論を讀む……高宮止
頼朝奉院宣擧兵於伊豆トスル説ヲ讀ム……菟久波山人
學科新設改稱及ヒ同課程改正●頃本文部大臣の演説●久米文科大學教授の祝詞●御陵墓發見●熊澤了介先生●逸事●朝鮮國教●明治美術會の講談會●賴支峰翁死去●チヤンバーレン氏に質す●物部守屋の墓

發行所 東洋學會
東京京橋區南傳馬町壹丁目拾二番地

東洋英和女學校計畫一斑

當校暑休ノ爲六月廿九日閉校來ル九月七日開校寄宿生ハ當日入舍通學新入生ハ同九日入校アルベシ
當校ハ我日本ノ婦女子ニ更ニ高尙完全ナル教育ヲ授ケンカ爲メ從來ノ普通科學期ニ更ニ二年ヲ加ヘ高等科ヲ設ケ特別ニ數學簿記和漢文學地理歴史心理學教育學等ヲ教授シ英語科中ノ數學ハ之ヲ止メ其時間ハ英文學及ヒ作文ニ用ユベシ此改正ハ文部省教員學力檢定試驗ヲ受ケ教員免狀ヲ得ント欲スル者ニハ殊ニ便利ニメ甚好都合ナルベシ
所望者多クシテ一級ヲ編成スルニ足レバ別ニ彩色及繡鳥ノ科ヲ設クヘシ
且教師ヲ增加シテ充分適當ナル教員ヲ持續センコヲ勤ムベシ
又九月ニハ新ニ科程規則ヲ定メ上梓シテ配布スベシ
現今ノ規則書ヲ望ム者又其他照會ヲ欲スル者ハ左ノ處ニ書翰ヲ投シ或ハ自ラ御出頭アリタシ

明治廿二年六月

麻布東鳥居坂町十四番地
東洋英和女學校

米國發刊 第十九世紀 下

十部郵稅共卅五錢
第七拾三號迄到着

東京本卿天神町壹丁目寓 䛔

女生徒募集公告

本校ハ九月十六日始業豫科一年生ヨリ各級入學ヲ許ス志願者ハ入舍學共九月十日迄ニ中込ベシ十二日ヨリ三日間入學試驗ヲ執行規則書ハ郵券二錢ニテ送付ス

明治二十二年七月

京都市今出川通寺町西入
同志社女學校

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

私立 **明治女學校** 新入生徒 **募集**

本學年試驗相畢り本科卒業生一名漢學科卒業生七名有之候○右に付最下級及び欠員ある級に對し新入生徒を募集す○規則書塾舍心得書入用の方は郵劵二錢封入申込あらん事を請ふ

私立 **明治女學校** 高等科 自由科 **新設**

本校開始后既に五年定めの如く第一回本科卒業生を得たるに付兼て預告したる如く今后新に高等科を設け且つ別に自由科を添ゆ○高等科一日二時間授業三年にして科目及受持講師大畧如左

日本歷史、心理學、倫理學		植村正久
歐米古今代史	米國技藝士	木村熊二
生物學	米國理學士	内村鑑三
理化天文學	理學士	木村駿吉
經濟學		金谷昭
英文學		未定
社會學		嶋田三郎
支那歷史、日本文學、教育學（未確定）		巖本善治

之を正科とし別に自由科を置き哲學、數學、獨逸語學、比較宗教學、家政學、音樂、畫學、を教授し望の者に自由受業せしめ且つ撰科生には右正科別科の内三四を撰み學ぶ事を得せしむ

右高等科有志の諸君は八月二十五日迄に申込あるべし凡そ本校普通科五年修業の學力に相當するものは十九名に至る迄で入校を許す

私立 **明治女學校** 文藝講話 **預告**

次學年の秋を以て始め時々文學々術上の大家に請ふて數回連續の講話會を開き廣く來聽を許して少さか文藝女學の普及に一助せんと欲す

東京九段坂上燈臺屹立する所ろ

私立 **明治女學校**

發兌

八月。三日 十日 十七日 廿四日 卅一日
九月。七日 十四日 廿一日 廿八日
十月。五日 十二日 十九日 廿六日
十一月。二日 九日 十六日 廿三日

定價

一册。六錢 郵稅。一錢（但府内無郵稅）
十册。五十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢
一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を登する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社々店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文喜堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町大村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年八月八日印刷
明治二十二年八月十日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE
"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.6[illegible] [illegible]
3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. [illegible]
The Jogaku Zasshi Office, No. 8, [illegible]
Kyobashiku, Tôkyô, Japan.